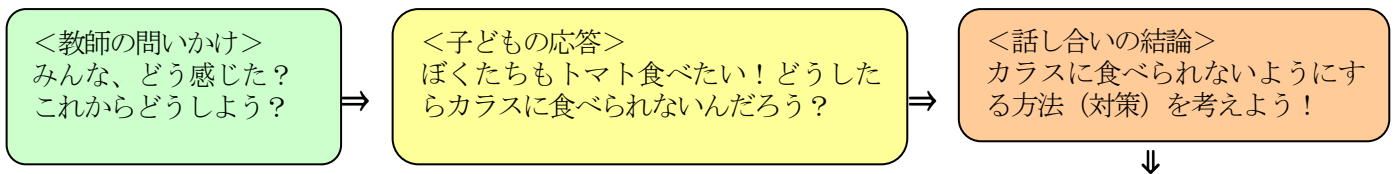


シオン山幼稚園では、＜・野菜の種や苗について知り、生長に興味を持つ。・友達や教師と一緒に世話をし、その大切さを知る。・収穫の喜びを味わい、おいしくいただく。＞の3つのねらいを持って、「シオン山農園を作ろう」という活動に取り組んでいる。5歳児は、種まきや苗植え、水やり、間引き、草取りなど、日々のかかわりの積み重ねにより、子どもたちは親しみを持って農園の栽培物や自然とかかわるようになっていく。

＜6月10日 トマトがカラスに食べられた！＞

5月下旬、トマトの小さい花をみて、「トマトにも花が咲いた！」と言う子ども。花が枯れて小さな実をつけたのを見つけて「あっ！赤ちゃんトマトができてる！」と、感激する子ども。また、葉っぱに隠れていたトマトの実を見つけて「あれ？こっちのトマトはもう大きくなっているのに赤くならないよ。売ってるのは赤いよね。何で？」と、驚く子どももいた。教師は「もうすぐしたら赤くなってくるよ」と、子どもに教えた。子ども達はいつ、赤くなるのかを調べることに興味を持った。2週間経った頃から徐々に赤くなってきた。おいしそうに色付き始めたので、6月9日の帰りの集会で、明日、収穫しようということになった。

次の日の朝、子ども達とトマトを収穫するために畑に行くと、「先生、トマトに何か穴が開いてる・・・」と言い、一番に張り切ってトマトに手を伸ばした子どもが手を引っ込めた。「カラスが食べたんじゃない！」「そうよ！裏山によくきとったやん！」と、周りにいた子ども達が口々に言った。また、「カラスも食べたかったんかねえ」とカラスのことを考えながらも、実っていたトマトが全部収穫できなかったことには残念で仕方がないといった表情を見せる子どももいた。この日は、収穫することができず、残念そうにしていた。



子ども達からは3つの解決法があがった。話し合いの結果、③の網かけが一番よいのではという声がたくさんあがったので、網かけすることに決まった。

- ＜子ども達から出てきた解決法＞
- ①先生が畑の見張りになる  
理由・・・「ぼくたち、お昼食べたら帰るけど、先生達は幼稚園におるやろ」
  - ②かかしを作って立てる  
理由・・・「カラスがびっくりするよ！」「人がいるって思うんじゃない？」
  - ③網をかける  
理由・・・「カラスが入れないように網をしたらいいんじゃない？」



これで大丈夫かな  
下の方も大丈夫かな

【網をかけた時の様子】・科学する心は、色々な失敗から生まれるのだと実感した。

＜6月14日 カラス対策に必要なものを自分達で考えて買いに行こう＞

早速、近所にあるホームセンターに網を買いに行った。売り場には、大きい網目と小さい網目のものがあつた。教師が「どっちがいいと思う？」と、尋ねると、「大きいのはくちばしが入ってくるから、また食べられると思うよ」「小さい方がいいと思うんだよね」と子ども達が言った。そこで網目の細かい網を購入した。その後、トマトの上にかぶせることにした。

**【考察】** せっかく収穫しようとしたトマトがカラスに食べられていた時、子ども達は残念がり、ため息も漏らした。しかし、この事件によって私達が赤く実ったおいしそうなおトマトを食べたいのと同じように、裏山近辺に住むカラス達も食べたいのだということが分かった。

**【この経験を通して実感したこと】** ・園の敷地内に生息する動物達の生態を知り、うまく共存すること  
・私たち人間にとって共存するための健康で安全な環境づくりを考えさせること。

＜7月15日 トマトは甘いんだね！＞

7月中旬、一学期も終わりに近づいてきた頃、一度は収穫に失敗したトマトを今度は収穫することができた。「先生、網かけといてよかったね！」「早く食べた〜い！」と言い、収穫できた喜びを感じていた。

「子ども達にお知らせします。シオン山農園でできたトマトを食べたい子どもにはじ組前のテラスに並んでください。」と、放送をかけた。すると、あっという間ににじ組前のテラスには、長蛇の列ができた。においを嗅いだ子どもは、「す

ご〜く甘そうなおいがる！」「おいしそ〜なおい！」と、おいを嗅いだだけで喜んでた。教師が「色はどう？」と聞くと、「真っ赤！すごくあか〜い」と口々に言っていた。「中に種がある！」と、種に気づく年長児もいた。「新しい命の元だね」と、話すと「じゃあ、トマトはトマトを植えたら、またトマトができるの？」という質問もでて考え合う子ども達もいた。

いよいよ食べることにした。「おいしい おいしい」と言い、トマトをほおぼる年少児と年中児の姿を見てうれしそうな年長児。そして自分達も食べてみると、「幼稚園のトマト、お店のよりあまい」「もう一回食べたい！並ぼう！」「私達が作ったトマトおいすぎる！」と言い、何度も食べにくる子どももたくさんいた。

そんな中、トマトのきれいなN男は、「本当においしいん？」と、疑わしそうな声だが、興味はあるらしく尋ねてきた。教師が、「幼稚園のは薬を使ってないでしょ、それにね、神様からの太陽の光と雨と愛の贈り物、そしてにじさん・ほしさんが一生懸命にお世話をしてくれて大きくなったからね、すごくおいしいと思うよ」と、答えた。N男はしばらく教師の隣で他の子どもがおいしそうに食べる様子やおいしい・あまいと言う声をきいた後、「おれトマト嫌いなんよね・・・でも、まあ、ちょっと食べてみようかな」と言い、一口食べたのだ。教師が、「どう？おいしい？」と尋ねると、N男はしばらくモグモグしていたが、嫌いな物を食べられたこともうれしかったようで、かなり弾んだ声で「おいしかった！」と答えた。

自分で作ったトマトは甘いと気づいたことは自分の手で作りだすことの喜びや意欲を育てるためのきっかけとなったと思われる。

### <8月3日 今度はカナブンがトマトを食べている！>

8月の始め、夏休みの中間日に、3日間の夏期保育があった。久しぶりに幼稚園にやってきた子ども達は畑にトマトがなっているのでは？と考えた。たくさんの収穫を期待して、年中・年長児の子ども達が畑に行った。「トマトはどう？もう食べられそう？」と後から畑についた教師が尋ねた。しかし、子どもからの「あったよ！」という声は聞かれず、逆に神妙な声で「先生、何かトマトを食べてる・・・」「なんかほら、ここよ。虫よね・・・」その声を聞きつけた虫好きの子どもが、「あっ、カナブンよ！！」と虫を見て即座に答えた。虫好きの子どもにとってもカナブンがトマトを食べている様子をみるのは初めてだったようで、「カナブンもトマト食べるんだね！！」と驚いていた。しばらくの間、こんなこともあるんだなとそれぞれがこの様子をじっとみながら、考えていることが分かった。教師にとっても始めてのことだったので子ども達と一緒に「カナブンもトマト食べるんだね。知らなかった！」と驚きあった。その後、「先生、もうこのトマト、カナブンにあげようよ！」「おいしそうに食べてるからね」と、言った。「ねえ カナブンが食べてるってほんとう？どこ？」と、聞きつけて、裏山の畑に走ってくる子どもの姿も見られた。

また、教師が土作りなどもっと工夫する必要を感じたことを伝えると、「畑を作っている人にきいてみようよ！」と言い、子どもなりに自然と共存するために工夫しようとする科学する心の芽生えを見ることができた。

～子ども達の気づきと考え～

- ・網をしていたけれど、虫はその網よりも小さいから、中に入ることができた
- ・カナブンが食べたいって思うほどおいしいトマトだった
- ・網の下の方に少しだけ隙間があったから、そこから入っていたのではないか
- ・薬を塗ったらよかったのではないか

「薬を塗ったらいいんやない？」「うん、うん。薬をつけたら嫌なおいがるして虫がこないんやない？」という意見が出た。しかし、安全性や衛生面からも、薬を使わずに虫がこないようにするにはどうしたらよいかと調べたり、教師間で話し合い、保護者や地域の方々に尋ねたりした結果、「薬を使わずに虫を取るしか方法はない」という結論に至った。子ども達にもこのことを話し、カナブンやその他の虫を取り除くようにしていくことにした。

**[考察]** カラス対策にかけた網の隙間からカナブンが侵入し、カナブンにトマトを食べられてしまった。しかし、カナブンにトマトを食べられている瞬間を目撃し、観察することができたことは貴重な体験になったように思う。カラスのような大きな鳥からは、網を使ってトマトを守ることができたが、カナブンのような小さな虫には対応できなかった。今回は教師が、「どうしたら〜」という質問をする前に、子ども達から次はどうしたらよいのだろうと考えたり、もっとよい方法があるのではないかと調べたりし始める姿がみられるようになった。様々なことに気づく幼児について、科学する心を伸ばす手立てに私達教師も気づくことができた。

### みどころ

「シオン山農園」で育てている野菜のひとつ**トマト**に起こった出来事は、子どもたちのたくさんの学びや成長につながりました。6月には、大切なトマトをカラスに食べられて、「カラス事件解決法」を話し合いました。そこで3つの解決策を出し、みんなで必要な網を考えて買い、トマトにかけました。この時、カラスもトマトを食べたいのだということを知り、園の敷地内に生息する生き物の生態や生き物との共存に結びつく経験をすることができました。8月、その子どもたちが、今度は大事なトマトを食べているカナブンを見つけたのです。カナブンとトマトの様子をよく見て言った、「カナブンにあげよう」ということばは意味が深く、心に残ります。カラス除けにした網の目は、小さなカナブンには効果がなかったこと、トマトはカラスもカナブンも食べにくるほどおいしいということを経験から知っていた子どもたちからは、様々な言葉があふれ出ていたことでしょう。自然をよく見て共感できる仲間や思うようにならないことを話し合う仲間の存在があることで、自然と向き合い問題を解決することができました。